

“微笑の国”を訪れて

—タイ王国福祉施設訪問団に参加—

別府大学文学部 人間関係学科

2年 大瀬 晃 一

Ⅰ はじめに



空港をぬけると、真夏のような日差し、湿度が低くカラッとした風。私は、12月25日から29日まで、「青少年団体連絡協議会タイ王国福祉施設訪問団」に参加した。

4年前、大分県青少年団体連絡協議会（以下、青少協）の会長・安東敏眞さんは、全国社会福祉協議会からタイに派遣され児童買春の問題について調査に行った時、今までの観光では見えなかったタイの裏の顔を見て驚愕し、何か出来ることは無いだろうかと思われた。それを、きっかけに青少協30周年記念事業として、タイ王国に支援をしようと昨年、議決され始まった。この訪問団には、小中高校生9人を含めた総勢45名が参加した。タイ王国の現状を知り、自分たちに何が出来るだろうかを考えるものだ。

出国の時、安東会長は言われた。「タイ王国は、微笑みの国と言われています。タイの子供達の笑顔はとても輝いている。是非それを見て欲しい」。

私は人間関係学科の学生サークルでもあるBBSの代表としてこの事業に参加した。私達別府BBS会は、大学内でタイの現状を写したパネル展示を行い、この事業に賛同し積み立てていた会費を寄付した。

タイ王国の人口は、6,188万人、国土は115平方

キロ（日本の約1.4倍）、宗教は95%以上の方が仏教を信仰している。教育制度は、日本と同じ6・3・3・4制だが、義務教育は小学校の6年間（平成14年度より、9年制に変更予定）だけだ。しかし、農村部ではそれすらも全う出来ない状況がある。経済状況は、1980年代から日本企業が参入し急速に発展した。1997年に経済危機に陥ったが、ASEAN内では、先進国の立場にある。日本は、最大の貿易相手で日本企業は、約2,500社が進出している。この為、職を求めて、近隣4カ国の人々が難民としてタイ王国に押し寄せている。しかし、彼らは難民なので教育も福祉も受けることは出来ない。現在、難民の人数は100万人とも言われる。国民、難民のエイズ問題がタイ王国ではとても深刻である。1984年に感染者第1号が発見され、現在は、130万人と推定されている。タイ王国で生活する難民、不法労働者など100万人の内、20%は、HIV感染者と言われている。憶測でしか言えないのは、誰も検査を受けない、受けられない現状があるからだ。また、都市部（バンコク）と周辺都市部（バンコク以外の都市）とで経済格差が大きいというのも問題である。

Ⅱ ちぐはぐな町並

いざタイ王国バンコクに踏み込むと、たくさんの日本車が走り、高速道路が整備され、派手な建物や日本企業の看板があちらこちらにあった。鉄道もあり、団地等を見ていると、各家にクーラーの室外機が見える。話に聞いていたタイ王国とは、全く違った光景が広がっている。しかしよく見ると、オフィス街に突然現れる空き地、川や鉄道の周りにトタンの屋根の住宅街が現れる。全体としては栄えているが、貧富が混ざり合っているその光景は、何か見栄っ張りな印象を受けた。

III スラム街の現実



2日目、私達は、ドゥアン・プラティープ財団に、この日の為に青少協の各団体が募金やフリーマーケット等で集めた寄付金と、大分県の各地から集めた衣類や文房具等の支援物資を、直接手渡した。このドゥアン・プラティープ財団はスラム街の中にあり、スラム街の児童のために幼稚園や小・中学校を建設し、教育を行っている。また、この財団は、「生き直し学校」として様々な家庭環境や虐待と闘ってきた子供達に教育を実施し、麻薬の犠牲になってしまった少女の更生や職業訓練等も行っている。

プラティープ財団訪問後、私達はスラム街を視察した。幅が約1.5mの狭い路地、とにかく匂いがひどい。穴を掘った上に家を建てている。生活排水をそのまま家の下に流し込んでいるようだ。家の下には真っ黒な水が溜まっている。私は、その水が汚いと思い、踏まないように路地を進んだ。しばらく進むと、壁の無い家もあり、プライベートの欠片も無い。その時、20代前半の男性が、家の中で音楽を聞きながらくつろいでいる。そこには、最新のオーディオ機器が見えた。ここでも、違和感を覚えた。しかし、それは前述の様に物質的なものもあったが、それよりも自分のプライバシーに土足で入り込まれているのにも関わらず平然としているスラム街の人々の精神に対してだった。私は、現地の添乗員のソムキャさんに思い切って聞いてみた。「この国の人々は自分達のプライバシーを観光にしている現状に怒りを感じないのか」。しかし、彼は「そんなことは気にしなくて良いですよ」とあっさり言った。その言葉は、まるで「プライバシーという言葉は先進国にしかありませんよ」と言っているかと思える程だった。私達は、暮らしの中で不自由を感じることは無く、贅沢な暮らしをしている。そんな私達が、まるでサファリパークの動物たちを見るような目で彼らを観察し、写真を撮っていく。その行為はとても卑しい行動に思えた。しかし、その行為に矛盾を感じているのに、私も写真を撮った。自分が情けない人間に思えてきた。

スラム街を出発し、私達は日本大使館に到着した。そこで、タイの現状を聞かせてもらった。大使館の人達の説明は、小学生でも理解出来る非常に分かりやすいものだった。この国の義務教育は6年制だが、それすら満足に受けられない現状がある。都市部では、ある程度は教育が受けられるが、北部、東北部のあまり栄えていない地域では、子供は大事な働き手だ。一日を過ごすのが大変で、とても教育を受けさせる余裕は無い。福祉はもっと酷いものだった。日本のように国民健康保険などは無く、国民は満足な医療を受けることが出来ない。国は打開策として、年間わずかな金額で医療を受けられる制度をつくったが、やはりこれも本当に困っている人たちには高すぎるものだった。

この国がなぜそうなってしまったのかを不思議に思う。この国を見て話を聞くと、中央に偏りすぎている印象を持った。私は、この国の地方行政がなされてはいないのではと思い、質問した。答えはやはりこの国では、地方行政が機能していないようだ。しかし、タクシン政権になり、この国を少しずつ変えていこうとしている。中央に偏りすぎている行政を分権し、地方ごとに教育、保険等の問題を解決していこうとしている。突然には変えることが出来ないのも、前述の保険は、その第一歩として始められた制度だ。

このタクシン政権だが、実は大分県とは深い関わりがある。「一村一品運動」をタイ王国の地域活性化に役立てたいと、タクシン大統領自ら来県し、どのようなモデルがあるのか、指導者の派遣等を平松県知事と熱心に検討された。これからのタイ王国がどう動くのか、それに大分県が深く関わっていることに関心をもった。地域発の試みがグローバルに活躍するのだ。

IV 少女の冷たい目とミャンマーの子供達

3日目、朝5時半に起床し、バンコク空港からチェンライに。空港到着後、ワゴン車に揺られ、私達はメーサイにあるルック・ニイン・センター(DEPDC)という施設に到着した。この施設は、少女売春の被害にあった子供達を保護し、社会に出る為の教育を行うところだ。現在、約50人の少女が保護されている。近年は、周辺国からの難民



や貧困から経済的に破綻する家族が増え、幼児の保護も始めた。総勢250人の子供達がこの施設で生活している。

この施設は外国の援助が命綱になっているが、アフガニスタンの戦争のために支援金が激減している。戦争になると他の地域の弱い立場の人達に真っ先に影響が及ぶ。

運動場には、バスケットボールやバレーボールのコートがあり、男の子達が遊んでいた。ちょうど、昼食の時間となり、子供達の食事の光景を見て、私は悲しくなった。一品しかない食事を、嬉しそうに食べている子供達。食堂となっている場所は、たくさんの虫が飛んでいる。日本人である私達は、ここで食事をする事は難しいだろう。私達の紹介が子供達の前でされた。彼らは合掌し、「サワディ・クラブ（こんにちは）」笑顔で私達に挨拶をした。でも、私は上手く笑うことは出来ない。裕福な日本人である私が、この状況で屈託の無い笑顔の子供達のいったい何が分かるのだろうか。ここで笑顔になるのは不謹慎な気持ちがあった。一步引いたところに立っていた私の目に、一人の少女が映った。今、食事をしている子供達よりも年齢が高く、13、14歳ぐらいの彼女は、つまらなそうに椅子に寄りかかっている。私達に乾いた視線をずっと送っている。彼女の目を見てしまった私は、なぜここにいるのかが、分からなくなってしまった。私達は、確かに支援物資は持ってきた。金銭の寄付もした。これらの寄付はとても大事なものだ。しかし、それは彼女達が本当に望んでいるものなのだろうか。何よりも彼女達に必要なものは、親の愛ではないだろうか。日本では、当たり前のように与えられるものが、この国では貴重なものなのだ。少女にあんな目をさせてしまう。これが、タイ王国の現状である。

ミャンマーの国境を私達は歩いて越えた。日本に住んでいると歩いて国境を越えるということは無いので私は感動した。すると、空き缶を持った子供達がたくさん近寄ってきた。日本語で、「お金をください」。子供達は合掌をしながら涙目で訴えかけてくる。中学生の女の子がお金を渡そう

としたが、私はそれを止めた。渡したい気持ちは分かるけれど、そうすると全員に渡すまで帰れなくなってしまうからだ。女の子は辛い表情でそのまま先に進んだ。私も目を合わせないように先に進んだ。橋を渡る途中、汚水の様な川で小さな女の子が食器を洗っているのが見えた。劣悪な環境の中、それを日常として受け入れている子供達を見るのは、とても耐えられない。縁日の夜店の様な商店街は、フェイク商品で溢れている。歩いて煙草を売って歩く人や、物乞いをする人は明らかに悲しく不安な目をしている。私はこの国に怒りを覚えた。国が国としての機能を果たさない為に国民は不安の無い毎日を過ごすことが出来ない。この子供達の未来の可能性を国がつぶしているのだ。カメラマンの羽田野さんは言った。「子供を使うのは、きたないよ」。私も同じ気持ちだ。この地に住む子供達は笑顔の時よりも、辛い顔の時のほうが多いだろう。共産主義国家の限界がここに表れている。

V 本来あるべき子供の姿

暗い気分のまま、ワゴン車に分乗し、未舗装の赤茶けた悪路に揺られ、私達はアカ族という山間民族の村にたどり着いた。鶏や豚が放し飼いで、とてもどかな村だ。しかし、この村には水道が通っていない。途中までは水道管がはしっていたので、近隣の村に水を汲みに行っているようだ。国内でも極貧地帯の一つに数えられるこのアカ族は、青少協がこの事業に取り組むきっかけになった村だ。3年前、バンコクで売春している14歳の少女がエイズで死んだ。12歳の時に8万で売られた少女は、このアカ族の出身だった。かつて麻薬が栽培され、今もこの村は、少女の人身売買によ





って現金収入を得ている。村の少女は、年頃になると、プロカーによってバンコクや世界各地に売られていく。

ワゴン車に近づいて来る子供達、その子供達の目は、先ほどのミャンマーにいた子供達の目と何か違っていた。とても澄んだ明るい目。とても人身売買が行われている村の子供達とは思えない。大人達は、突然の来訪者に驚き様子を窺って、なかなか私たちの前に現れようとはしなかった。

一人の男の子が拳銃のオモチャを持っている。私は手を拳銃の形にして彼とガンマンごっこをした。すると、その子の友達も寄ってきて、さながら銃撃戦の様だ。私が大袈裟に撃たれた芝居や弾を避ける芝居をすると彼らは大喜び。私は彼らとともに仲良くなった。言葉は通じなくても、身振り手振りでコミュニケーションを取れる。国境や言葉の壁は彼らには全くない。これは、子供の世界では当たり前のことだ。住んでいる場所は違うけれど、当たり前の子供の姿がアカ族にはあった。しかし、ここには人身売買によって現金収入を得ている現状がある。いつか、この子供達は売られてしまうのかもしれない。出来ればここに住む子供達の笑顔が、いつまでも絶えることが無いように私は帰りの車の中で祈った。

VI 生きるということ

4日目、最終日は帰国するだけなので、この日がタイ王国での最後の日となった。この日は、エメラルド寺院やアユタヤ遺跡など観光地を見学した。途中、私達は象使いの人達が集まっている場所に行った。観光客を象に乗せて収入を得ている場所だ。象はただ生かすだけでもたくさんの餌、つまりお金がかかる。近隣の国の象使い達が、仕事を求めてタイ王国に流れてきている。タイ政府は、営業する場所を設置して支援をしているそうだが、生活は楽ではなさそうだった。私は、観光気分でお金を稼ぐことが出来なかった。添乗員のソムキャさんと二人で、象に乗ったみんなを待っていた。ソムキャさんは「象に乗ることで、この

象たちは助かります」と言う。乗る気にはなれなかったが、私はミルクを買い小象にあげた。

ミルクをあげながら思う。ここでも、弱者が辛い状況に追い込まれている。生きる為の選択肢がどんどん無くなっていく様子を私は見ているだけだ。しかし、見る事ができただけ良かったのかもしれない。この状況を知らない人、関心の無い人もいる。私は、この研修中、色々な事が分からなくなっていた。日本の中にいる限り見えてこない世界の環境は、日本人の私には、とても悲しく、辛いものだった。しかし、関心を持った。日本に帰って、何が出来るのかを考えることが出来る。この許されない現状が何によってもたらされたのか。そして、この環境を打破する術をこれから考え、自分なりの答えを見つきたい。

VII 最後に

日本に帰って一週間が経った。元旦から大分合同新聞で、この訪問団の特集が掲載された。それを見るたびに思い出す。子供達の姿、町の匂い、そのどれもが鮮明だ。今回の訪問で一番私が考えたこと、それは「本当の豊かさとは何か」、何をもって「豊か」とするのか、物質的なものなのか、経済的なものなのか、それとも精神的なものなのか。タイ王国の人達は、物質的、経済的に豊かでは無いが、精神的に私たちより豊かだ。私達日本人は食べるもの、住むところ、遊ぶところ何でもある。しかし、その環境に甘えていて、いいのだろうか。国境を越えれば、私たちが想像も出来ない現実が、悲しい程転がっている。私達は、同じ地球人だ。国、肌の色、言語、文化、違うところはたくさんある。しかし、そんなつまらないもので人を区別することが、いかに愚かかを知り、お互いを尊重し合うことが、これからの21世紀の人間のあり方だと痛感した。人間関係学科の学生として、人間＝日本人では無く、人間＝この地球に住む、全ての人々と考え、これからの学生生活を送っていきたい。

(11p、12p、13pの写真は、羽田野雄治氏提供)